研究とその社会的意義

高山　博（東京大学名誉教授）

私の専門は西洋中世史です。これまで中世ヨーロッパの統治制度の比較や中世地中海における異文化接触の研究を行ってきました。私が西洋中世史の勉強と研究を始めたのは大学の学部学生3年だった1978年ですので、その時からほぼ46年が過ぎたことになります。西洋中世世界とイスラム世界の文化交流に興味があった私は、両文化が接触していた中世スペインと中世シチリアに惹かれ、不明な点の多かった中世シチリアを研究対象に選びました。そこでは、ラテン文化、ビザンツ文化、イスラム文化が併存し、ラテン語、ギリシア語、アラビア語が使われており、多様な文化が重層する歴史の複雑さと多言語史料読解の困難さのために未解決の謎が多く、知的刺激に満ちていました。大学院進学後は、三つの言語の用語が錯綜するシチリア王国の行政機構に焦点を当て、研究成果を欧米の学術機関、専門誌で発表してきました。現在の私の関心は、中世地中海の異文化接触・交流にまで広がっていますが、複数の文化・宗教が併存していた中世シチリアは、グローバル化が進行し多様な文化的背景をもつ人々が交流・衝突する現代世界と共通する側面を有しており、現代世界理解のための有益な示唆を与えてくれるのではないかと思っています。

今から振り返れば、私が長い間中世シチリアの研究を続けることができたのは、よくわからない世界に好奇心を刺激され、謎を解く楽しさに夢中になっていたからではないかと思います。そのような研究テーマとの出会いが、私のその後の人生を決定づけたような気がしています。若い研究者のみなさんが私と同じような経験をされるかどうかはわかりませんが、もし幸運にも夢中になれる研究テーマや謎と出会えたら、それをしっかり掴んで全身全霊をかけて研究に打ち込んで欲しいと思います。

その一方で、自分の研究が研究史の中でどのような位置にあるかを意識し、社会にとってどのような意味と意義をもつかを自らに問い続けるという、客観的な視点も持ってほしいと思います。これは、自分が生きている社会において、自身の研究の存在意義を確認する重要な作業です。そして、高梨財団のような研究助成を獲得するために必須のことがらでもあります。国や財団など第三者からの助成を得るには、自分の研究の意義を自覚し、それを多くの人たちに理解してもらえるよう努力することが求められます。そして、それは自分自身が自信を持って研究を続ける原動力にもなります。